

# 中世の津軽安藤氏と 蝦夷島における和人地の形成

## I アイヌ民族の歴史

### ①考古学上の時代区分

＜続縄文文化＞ 弥生文化は伝わらず、縄文時代からの伝統社会が続いた。小寒冷期に当たり一時東北地方にも広まった。

＜オホーツク文化＞ 5～6世紀、サハリンから道北に漁撈や海獣の狩猟、そして犬や豚を飼育する人々が移住してきた。彼らは7～8世紀にはオホーツク沿岸から千島南部に居住域を拡げた。独特な土器を持ち、5角形ないし6角形の竪穴住居に住み住居の奥に熊などの獣骨が積み上げられていて、熊に対する信仰は後のアイヌ文化時代に伝承されたと考えられている。大陸系の青銅器も発見されていて、アムール川下流やロシア沿海州に発達した文化と係わりが深いことが分かっている。

9世紀頃には擦文文化に吸収された。

＜擦文文化＞ 7～12世紀。東北地方の土師器の影響で土器に縄文を付けなくなり、木片で表面を整えるようになった。擦文土器は北海道、東北北部、僅かながらサハリンからも発見されている。狩猟採集と畑作農耕が行われ多くの鉄器が用いられるようになり本州（五所川原）で生産された須恵器も使われた。住居は竈つきの竪穴式住居で東北地方の影響が強い。擦文文化は土器文化の最後である。

＜アイヌ文化＞ 土器に代わり、鉄器や木器、漆器が多く使われ地上の平地式住居に住むようになる。

「耳つきの鉄鍋と囲炉裏の生活」。

②擦文文化までは、津軽海峡をはさんで東北北部と北海道にまたがっていた。奥州藤原氏の時代に東北北部まで律令国家の支配下となり、両地方の文化は分断された。擦文文化の時代は両地方ともに防御性集落が多く分布、戦いの時代でした。弥生時代と違って、拠って立つ生業は、米だけではない。津軽は米、糠部・下北は馬や林業、北海道＝アイヌ民族＝は鮭・昆布それに「交易」でした。

③日本は戦国期、ないしは江戸時代の前半まで、著しい経済成長を遂げたと考えられる。貴族や武家社会で北方の品々に対する需要が増えていった。一方でアイヌの人たちは土器（自分で作れる）から鉄器や漆器に切り替えたため、ますます日本への依存度を高めていった。日本で使われる交易品を求めて、アイヌの人たちはサハリンやロシアのアムール川の河口にまで出かけて狩猟を行い、現地人（ギリヤーク）と戦いになった。現地人は「元」の支配下にあったため、元とアイヌ民族の戦いとなり降伏、「元」に朝貢した。「明」の時代にも朝貢を続けた。以下中国の「元史」、「元文類」

「勅修奴児干永寧寺碑記」などによって分析した「アイヌ民族の歴史」—檜森進氏—により、少し詳しく見ておきたい。

- ④元朝の最初の「骨鬼」（アイヌ）征討の記事は1264年。20年後の1284年に本格的に征討開始。1285年、「元」は東征元帥府をアムール川下流に置いた。ブランクの20年は丁度日本の元寇と重なっている。文永の役（1274年）、弘安の役（1281年）。この間は戦いに多くの兵を日本に送ったためアイヌとは休戦状況となった可能性あり。

40年間も「元」と戦ったアイヌは1308年「元」に屈し、二人のアイヌ首長が使者を東征元帥府に派遣して降伏、刀や冑を元軍に差し出して、以降毎年朝貢を続けた。

1368年、元朝滅亡。同年、漢族の朱元璋が応天（南京と改称）で即位、「明」建国。周辺各国に朝貢を求めた。足利義満は永楽帝により「日本国王」に冊封された。明朝の東北支配の拠点、遼東都司と「元」の拠点だった場所に設けた奴児干都司（ヌルカンとし）であった。ここに永寧寺をたてた。アイヌも朝貢。しかし、永寧寺は焼かれ、その後明朝の支配体制立て直しには時間を要したようだ。

- ⑤「エミシ」「エゾ」

・「エミシ」 蝦夷、毛人、夷、狄、狄とも表記、「エミシ」「エビス」と読むのが一般的。朝廷にまつろわぬ人の意。

・「エゾ」 平安中期以降に「エゾ」と読まれるようになった。対象地は主に北海道。「エゾ」の初見は12世紀の和歌。ただし11世紀後半、陸奥守・源頼俊が「衣曾別島の荒夷と閉伊七村の山徒を打ち従えた」中、エゾノワケ島と読んでこれを初見とする説あり。

- ・小野毛人、鴨君蝦夷などは「強い人」の意
- ・王朝文学では「気持ちの読めぬ情緒のない人」と使われた例あり。
- ・東夷

鎌倉幕府の「東夷征敗権」の対象は北海道。

後醍醐天皇 正中の変にかんして。「関東者東夷也」。 「花園天皇日記」

秀吉の小田原攻めを「東夷成敗」と記す「氏郷記」

- ⑥イオマンテ（「アイヌ史のすすめ」—平山裕人 による）

サハリンアイヌから伝わったと考えられる。時期は意外と新しい。文献上の初見はオランダのフリースによる「フリース船隊航海記録」（1643年）であり場所はサハリンの北知床半島である。

17世紀前半の交易品に熊はないが、後半には熊の皮、熊の肝などあり、この頃からか。ずばりイオマンテの記事は松宮観山「蝦夷談筆記」（1710）。以上は「アイヌ史のすすめ」による。

\* アイヌのイオマンテは小熊飼育型であり、サハリン、ロシアのアムール川下流域の諸民族に見られた儀式。

\* イオマンテの考え方。神の国から熊に化身しての人間界へのプレゼント。お土産（お供え）をつけて丁重に魂を神の国へ送り返す儀式をイオマンテという。

- ⑦ユーカラ アイヌ民族は文字を持たなかった代わりに口承文学が発達していた。大別して韻文の物語（うたわれるもの＝ユーカラ）と散文の物語に分けられる。ユーカラは神のユーカラと人間の

ユーカラに分けられる。一般的にユーカラといえば「人間のユーカラ」で主人公は英雄。

英雄ユーカラは古代ギリシャのホメロスによる「イーリアス」「オデッセイア」や古代インドの「マハーバーラタ」「ラーマヤナ」、フィンランドの「カレワラ」などと共に世界の代表的叙事詩の一つに数えられている。

## II 大和政権東上の歴史（陸奥・出羽国）

- ①大和政権は7世紀以降国家体制を強化、城柵を北に進め蝦夷制圧をテコに国家領域を拓いていった。当初は懐柔策により俘囚の長に支配を任せながら前進したが、724年多賀城を設置、活動を強化するにつれて反発も強くなり、宝亀（770年）から弘仁（810年）に至る40年近い大戦時代を迎えた。国司への不満も加わり、一度恭順した蝦夷（俘囚）の反乱ゆえに戦闘能力が高く、朝廷側は苦戦。これまでの活躍著しい坂上田村麻呂を征夷大將軍として4万の兵を投入してやっと鎮圧し、反乱軍の首謀・阿弭流為を斬首、反乱はおさまった。
- ②延暦24年（805）桓武天皇は平安京内裏の殿上において参議の藤原緒嗣と菅野真道に天下の徳政につき相論させ、若い緒嗣の意見（天下の苦しむ所は軍事と造作なり）を入れて政策転換。以降の蝦夷対策は「夷には夷を以て制す」方針とした中で、阿部氏と清原氏が台頭、前九年、後三年の役を経て平泉に拠点を置く奥州藤原氏の支配下、本州の北端まで律令支配下に置かれた。
- ③鎌倉幕府の統治  
奥州藤原氏の滅亡後、荒野と化した、とてつもなく広い大地に幕府は意図通りに御家人を配置した。そのメンバーは葛西、井沢（後の留守氏）、畠山、北条、三浦、南部、安達（出羽）など。東夷成敗権を朝廷より得て蝦夷地は流人配流の地として、北条氏の被官・安藤氏を「蝦夷管領」とした。安藤氏は阿部氏の末裔といわれる。なお、「蝦夷管領」は通称。  
北条氏は次々に頼朝時代の御家人を滅ぼしたため、鎌倉末期の奥羽の地は大半北条氏の所領となった。北条氏との姻戚関係や処罰などで手に入った土地も加わっている。所領も増えたが、相論などの問題も同時に増え、幕府機能はマヒ状態に。1322年の蝦夷の叛乱を抑えられない安藤太は改易され1325年弟の宗季がその職に。兄弟間の争いも加わり蝦夷の叛乱はおさまらず、幕府は元寇なみに主要寺社で祈祷。これが朝廷による倒幕計画につながっていく。
- ④1333年に建武政権は、旧鎌倉幕府の背後にあたる奥羽には強力な「陸奥国府」体制を敷く。関東の旧御家人が奥羽の地に多く所領を持っていたので切り離す狙い。北畠顕家は義良（のりよし）親王を奉じて入部、各郡に郡奉行所を設置して旧領主に反抗しなければ所領安堵した。北条氏の御家人であったか否かは問わなかった。これはかなりの成果をあげた。後の1336年、室町幕府を開いた足利尊氏は関東10か国を管轄する「鎌倉府」を置き、陸奥国には斯波家長を奥州総大将として、出羽国には葉室光顕を出羽守に送り巻き返しを図った。出羽国には葉室氏の死により、顕家の弟・兼頼を送った（後の最上氏）。この間北畠氏は尊氏叛乱（1335年）上洛、そして1337にも足利氏討伐の為、上洛そして討死により、1342年頃には伊達氏、葛西氏、南部氏などの有力者は北朝側に帰属したと見られている。1350年、いわゆる観応の擾乱により足利方は分かれて戦い、南朝勢力が一時盛り返したが、足利氏の内訌が解決すると再び形勢逆転。この頃幕府は次々に石塔、吉良、畠山を奥州管領に送り、「4管領」時代といわれた。しかし彼らは次第に土着化、国人化していく。1391年、奥羽は「鎌倉府」の管轄下に置かれた。この背景は「鎌倉府」の不満のガス抜き

とみられている。この時、奥州管領は効力を失う。鎌倉府は氏満の弟二人を陸奥に送るが何もなしえず。1400年、幕府は再び奥州探題に斯波（詮持、または満持）を任命、この後「大崎氏」を名乗る。

幕府と鎌倉府、鎌倉府と関東管領上杉氏の対立など関東では15世紀の初めから一足早く戦国時代の様相を帯びてきた。南奥羽ではこの頃、国人領主間の一揆（＝同盟）や婚姻による地縁的つながりを強める。そうした中、伊達植宗（政宗の曾祖父）は①その実力 ②奥州探題・大崎氏の弱体化により、1522年頃陸奥国守護に補任された。晴宗（政宗の祖父）は1555年頃に正式に奥州探題に補任された、居城を米沢に移した。しかし秀吉の奥羽仕置きにより伊達政宗の所領は削減される。なお北奥羽はあまり管領の支配はおよばず、1418年、南部氏の上洛と將軍義持への謁見・貢納、1423年安藤氏の上洛と將軍義量への謁見・貢納と幕府直結。この後、両氏の争いが激化する。

### Ⅲ 安藤氏と南部氏 そして蝦夷地における和人地の形成。

#### 一、安藤氏

拠点を津軽の十三湊におき、既に鎌倉時代より蝦夷地管理を任されていて蝦夷地には家人や同族を送り現松前町大館を拠点としていたと推定されている「松前の歴史」。下国安藤氏の拠点・十三湊は「壮大な城と美麗幽玄の神社仏閣、そして多数の商家、民家を有し京船、夷船むれ集まって到底鄙の地とは思えない繁栄ぶりを示した―「松前の歴史」―が、1432年、康季の代になり南部氏の攻撃を受ける。

①康季、鹿季は1394年に勃発した「北海蝦夷動乱」の鎮圧の功により湊家（盛季の弟・鹿季が祖。現秋田市）は將軍直属の「京都御扶持衆」に、下国家もそれに等しい身分を与えられ「屋形」号を許されて守護大名なみの地位を認められた。なかでも下国家は幕府から「日ノ本將軍」と呼ばれる地位へ。1423年、安藤陸奥守（官位は従4位相当）は新將軍・義量就任の賀として馬20匹、取り5000羽、鷲眼（＝錢）2万疋、ラッコの皮30枚、昆布500把献上。錢2万疋は20万枚である。

②1432年、安藤盛季、康季は南部氏に攻められ蝦夷が島に敗走。幕府（義教）は安藤氏と南部氏の和解に乗り出したん和解した。1436年、安藤康季は後花園天皇の命により、若狭羽賀寺再建に着手した。当時の羽賀寺は青蓮院の末寺、青蓮院は延暦寺3門跡の一つで義満の第4子が10歳から「僧円」として修行、天台座主を経て“くじ引き”により將軍となった義教のゆかりの寺であり、後花園天皇から義教へ、そして大富豪の安藤氏へ下命があったと推察される。

1441年、義教は赤松満祐により斬殺された。その翌年には南部氏は再び安藤盛季と康季を攻めて十三湊を追われた安藤氏は蝦夷が島へ渡った。このため羽賀寺の再建は遅れ、1447年によく落慶法要が行われた。

1453年には安藤義季が自害に追い込まれて総本家は滅亡した。十三湊攻略後の南部氏は安藤師季（政季と改名）をかついで田名部に傀儡政権を樹立した。ところが、傀儡の安藤師季は武田信広、相原、河野らと蝦夷島に逃亡。師季は道南に3守護体制を敷いて1456年、小鹿島（現男鹿半島）に渡り松山安藤氏を起こした。

## 二、南部氏

現青森県の東半分を占める糠部郡を支配。安藤氏同様に多くの家の連合体であった。宗家の三戸氏は地位を高め、南北朝合体後の13代守行は室町将軍より「京都御扶持衆」に指名され「屋形号」も許されて糠部郡の主となっていた。また多くの当主の官位も高く、極官は従4位下修理大夫であり、奥州では蘆名、白川（白河結城）と並ぶトップクラスであった。

南部氏、安藤氏ともに「北辺の抑え」「交易品や産品」への期待から、幕府に特別扱いされていたように思われる。

南部義政は1418年上洛、将軍義持に馬100匹、金1000両を献上している。

## 三、蝦夷地における和人地の形成。

藤原氏残党や鎌倉時代の流刑者の流入などにより早くから西は余市、東は鵠川にいたる広大な地域が和人とアイヌの混住地となっていたと考えられる。道南には12館が築かれ、函館あたりが交易の中心と考えられている。函館空港近くの志濃里館の跡は方形で交易か政庁あとも考えられている。また、付近から大甕3個にいたる37万枚もの古銭が発見された。

1457年、安藤氏が小鹿島に渡った翌年、アイヌ民族の蜂起により12館は次々に襲われた。12の内残ったのはわずかに「茂別館」と「花沢館」のみで和人はこの両館に逃げ込んだ。

原因は和人の鍛冶屋にアイヌの少年がマキリ（小刀）の製作を頼んだが、切れ味をめぐりトラブルになり、ついに鍛冶屋が少年を殺害した。1512年、これに怒ったアイヌが12館を総攻撃した。しかし、後に、計略により花沢館の館主・蠣崎季繁臣下の武田信広が、その強弓で大将コシャマイン父子を倒し乱を取めた。1550年和人と蝦夷地の境界に二人のアイヌ部族長を置き、商船から得た税の一部をわたり、又商船が付近を通るときには帆を下げて一礼させる事でアイヌと和解、和人地が確定した。この範囲は和人混住地だったころに比べるとずい分狭い範囲である。信広は季繁の養女と結婚、蠣崎姓を名乗った。なお、養女は茂別館主・下国家政の娘であったことから、安藤氏との結びつきが出来て松山安藤氏の代官として蝦夷地の支配を任された。なお、蠣崎氏は秀吉に臣従、奥羽総無事令違反の九戸氏討伐にはアイヌを率いて参戦活躍、肥前名護屋城にも出向いている。秀吉により朱印状、家康にも臣従、黒印状を与えられ、安藤氏から独立した大名となり松前氏に改名。ただし知行は石高ではなく蝦夷との交易権であった。余談ながら、秀吉の肥前名護屋城の周りには140以上の大名の陣屋が出来たとされているが、名護屋城では家康の仲介で南部氏、大浦氏（南部氏の一派）、安藤氏の歴史的な和解となった由。

### 参考文献

これならわかる東北の歴史Q&A	一戸富士夫  桧森進	大月書店
北から見直す日本史	石井進  網野善彦	大和書房
中世奥羽の世界	大石直正  他	東京大学出版会
周縁から見た中世日本	大石直正  他	講談社
中世十三湊の世界	青森市市浦村	新人物往来社
概説松前の歴史	松前町  町史編集室	
アイヌ民族の歴史	桧森進	草風館

アイヌ史のすすめ	平山裕人	北海道出版企画センター
アイヌ文化の基礎知識	秋野茂樹 他	草風館
伊達政宗・仙台への道	斉藤潤	仙台・江戸学叢書
秀吉の天下統一戦争	小和田哲男	吉川弘文館
鎌倉・室町将軍家総覧（歴史と旅 特別増刊号）		秋田書店

**参考文献** 森正人「四国遍路」中公新書 るるぶ「四国88ヶ所」JTB  
「四国遍路ひとり歩き同行二人」へんろみち保存協会  
ウィキペディア